

高齢者入所施設の介護職者の介護負担の検討（その2）

— 経験年数からみた介護職者の負担 —

井関 智美*・三上 ゆみ・豊田 美絵

地域福祉学科

(2010年11月17日受理)

介護職者の介護負担軽減のための基礎的資料を得る目的で、介護福祉士として高齢者施設介護に従事しているA短期大学の卒業生を対象にして、介護負担に関する調査を行った。介護経験年数（ $n=41$ ）を3区分（経験短期区分 $n=17$ 、経験中期区分 $n=16$ 、経験長期区分 $n=8$ ）して介護負担要因の状況を調べた。その結果、従事する施設種別は経験長期区分と経験短期区分が特別養護老人ホームで多く、経験中期区分は老人保健施設が多くなっておりその傾向は異なった。夜勤回数は経験短期区分が最も多く夜勤の1番の担い手であった。業務負担感では経験長期区分で負担感が高い業務が多く、経験中期区分で負担感が低い業務が多かった。経験短期区分はその中間にあった。また、経験長期区分において他の区分より負担感が有意に高かったのは安全管理、コミュニケーション、記録の業務であり、それは経験長期区分で既婚者が多いことや管理的な自覚を有していることの影響が推察された。また、本調査より介護負担軽減の手がかりとなる基礎的資料が得られたと考えている。

(キーワード) 高齢者施設, 経験年数, 介護業務, 介護負担感

はじめに

現在、わが国では高齢化に伴い介護のニーズは増大の一途をたどっている¹⁾⁻³⁾。そのために、要介護度の重度化や介護職者の数の不足から⁴⁾⁵⁾、介護職者個々にかかる労力は増大していると考えられる。一方、社会的には利用者の尊厳を守る介護が重視されるようになり、従来からの介護のあり方が問われている。介護職者の人員確保による介護労力軽減と介護の質の向上の両立が緊急の課題となっている⁶⁾。

筆者らは高齢者施設における介護職者の介護負担の研究⁷⁾として、施設の種別（特別養護老人ホーム、老人保健施設、グループホーム）における介護職者の業務別の負担感を明らかにした。その結果、特養、老健では日勤、夜勤共に業務中の排泄、移動介護で負担感が大きく、また、特養、グループホームの夜勤では安全確保の業務で負担感が大きかった。このように施設の種別と負担感の関係は明らかになっているが、介護職者の経験年数と負担の詳細な関係は未だ明らかになっていない。従来介護負担の研究は在宅介護者の負担の研究⁸⁾⁻¹¹⁾が多く、施設介護職者の負担の研究¹²⁾⁻¹⁵⁾は少ない。在宅介護負担の研究では要介護者の介護期間でみたものはあるが¹⁶⁾、介護の経験年数でみたものは見あたらない。施設介護職者の介護負担の研究では、

経験年数を介護職者の属性として調査しているものの、分析にまで至っていないもの¹⁷⁾⁻¹⁹⁾が殆どである。また、介護負担を時間やエネルギー消費の面から検討したものが僅かにあり、経験短期者で時間やエネルギー消費が大きいとするものがある²⁰⁾。しかし、介護職者の感じている負担感と経験年数との関係を詳しく検討した研究は見当たらない。

介護負担の要因は種々多様にある。介護の経験年数や職場の人間関係、家庭環境（家事・育児の多少）もその一つである。専門的技術や知識の習得に關係する経験年数については、経験年数が少ない者では技術の習得が不十分で一つひとつの介護に時間を要し、エネルギーの消費が大きいと言われている²¹⁾。また、経験年数が少ないために技術が未熟であることから自信がない。そのために経験年数が少ない者では心身ともに負担が増大することが考えられる。また、職場での人間関係が浅く摩擦が生じる者が多く、ストレスが溜り精神的負担が増大すると考えられる。そのため特に経験3年未満の介護職者では離職者が多いといわれている²²⁾²³⁾。また経験年数が増えることで職場の人間関係が深まり他者の支援が得られ易い側面がある。また発言力が高まり、自分の思いが実現されやすくストレスが少ない状況ができると考えられる。しかし、経験年数が増えると役職がつくことも多く一方で既婚者が増加し、管理的な負担や家事の増大が生じ介護負担感の増大に影響すると考え

*連絡先：井関智美 地域福祉学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

られる。このように経験年数の多少により介護負担感に変動かあると考えられるために経験年数を軸にして本研究を進めた。A短期大学の卒業生で介護福祉士として高齢者施設で働いている者を対象にして、介護負担に関する調査を行った。その結果について、介護経験年数を3区分して一般的に用いられている介護業務の負担感の程度を比較すると、経験長期区分で負担感が高い傾向を認め、経験中期区分で負担感が低い傾向が認められたので報告する。

研究目的

介護職者の介護負担軽減のための基礎的資料を得る目的で、高齢者施設の介護に従事する介護職者の介護負担を経験年数の関連で明らかにする。

研究方法

1. 調査方法は留め置き法による無記名自己記入式質問用紙を用いて調査した。
2. 調査対象はA短期大学地域福祉学科(介護福祉士養成)の全卒業生からランダムに選んだ者(300名)から回答のあった56名(回答率18.7%)中の高齢者施設の従事者41名とした。
3. 調査期間は平成21年7月10日～7月31日であった。
4. 調査項目は施設の種別、入所者数、介護職者、おむつ使用者数、経験年数、夜勤回数、介護職者1人交換1回時の交換人数、9種の介護業務(排泄、食事、移動、更衣、整容、健康管理、記録、コミュニケーション、安全確保)別介護負担感の程度(日勤帯と夜勤帯)等であった。
5. 調査内容の介護業務別介護負担感の程度については、4択肢とし負担が高い方から「④非常に負担がある」、「③負担がある」、「②あまり負担がない」、「①負担がない」として設定した。また、これらは負担が高い方から順に4点、3点、2点、1点の得点を与え点数化した。
6. 分析については、SPSS11.5JforWindowsを用いてすべてのデータの集計を行った。また、調査項目の施設の種別、夜勤回数、介護職者1人交換1回時の交換人数、9種の介護業務別負担感の平均点数について経験年数3区分(0-5年未満:経験短期、5-9年未満:経験中期、9-13年未満:経験長期)は文)で検討した(経験年数区分の設定は永田らが用いた区分²⁴⁾を参考にして筆者等が修正設定したものである)。9種の介護業務については昼夜を通じて介護職者が一般的に行っている業務とし、その業務で感じている負担感を調べた。平均点数の3.0以上の業務負担感が高い業務とした。経験年数区分別で比較し、有意差検定はクラスカルホリス検定、ウィルコクソン検定で行った。
7. 倫理的配慮は本学倫理委員会の承認を受け、調査対象者には本調査で得られたデータは統計的に処理を行い、

無記名で個人が特定されることが無いこと、研究以外の目的には使用しないこと、回答行わないことでの不利益は無いこと、研究終了後にデータの破棄することを文書で説明し、調査票の返送をもって、調査への同意が得られたものとした。また、調査票回収後はデータの保管を十分行い関係者以外への閲覧を避けた。

結果

1. 介護職者が所属する施設の種別

介護職者が所属する施設にはどのような施設があるかを知るために、介護職者の所属施設を調べた(表1)。所属する施設(n=56)を施設種別でみると、特養18人(32%)、老健13人(23%)、グループホーム10人(17%)であった。特養が最も多く、次いで老健、グループホームの順であった。特養、老健、グループホームに所属する者の合計は72%で全体の4分の3を占めて多かった。以後、この3つの高齢者施設の回答(n=41)について分析を行うこととした。

2. 経験年数からみた介護職者の分布

経験年数による介護職者の分布を知るために経験年数の

表1 施設の種別と回答者数

施設の種別	回答者数	回答者数%
特養	18	33
老健	13	23
グループホーム	10	18
養護老人ホーム	2	4
病院	1	2
ケアハウス	1	2
小規模多機能施設	1	2
障害者施設	1	2
有料老人ホーム	3	5
他	5	9
計	56	100

74%

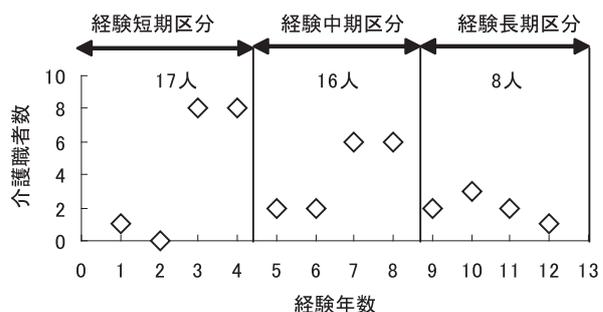


図1 経験年数における介護者数

人数を調べた。また経験年数を3区分（0—5年未満：経験短期，5—9年未満：経験中期，9—13年未満：経験長期）して検討した（図1）。3年と4年が共に8人で最も多く、次いで7年と8年が共に6人であった。1年，2年，12年は1人以内で少なかった。経験年数3区分でみると，経験短期区分と経験中期区分が17人，16人で同程度であり，経験長期の8人より多かった。

3. 経験年数区分における施設種別の介護職者数

施設の種別の違いは介護負担感に影響すると考えられるので，経験年数区分別における施設種別の介護職者数を調べた（n=41）（図2）。その結果，経験中期区分では老健が8人（50%）で多く，特養が3人（18%）で少なかった。反対に経験長期区分では老健が1人（13%）で少なく，特養が5人（63%）で多かった。経験短期区分では特養が10人（59%）で多かった。このように経験中期区分は老健に従事する者が多く，他の区分（特養に従事する者が多い）と傾向が異なっていた。

4. 経験年数区分からみた配偶者有りの人数

既婚者は未婚者より家事が増えて忙しくなり，特に女性で忙しいと言われている。配偶者が居ることが介護負担感に影響するのではないかと考え経験年数区分からみた配偶者有りの人数を調べた（n=41）（図3）。その結果，経験短期区分では3/17人（18%），経験中期区分が7/16人（44%），経験長期者が5/8人（63%）であった。このように経験長期区分で配偶者有りの率が高かった。

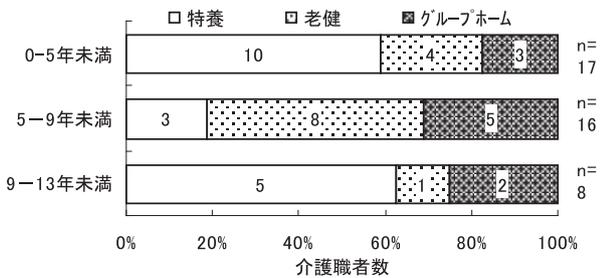


図2 経験年数区分別における施設種別の介護職者数

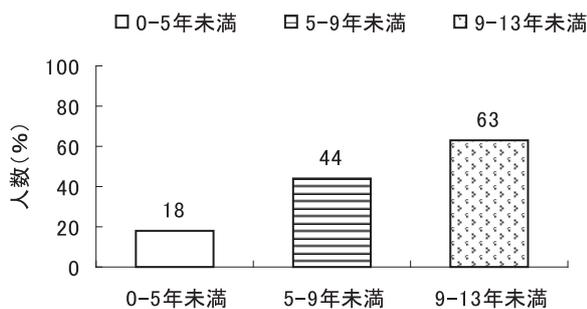


図3 経験年数区分別の配偶者有数

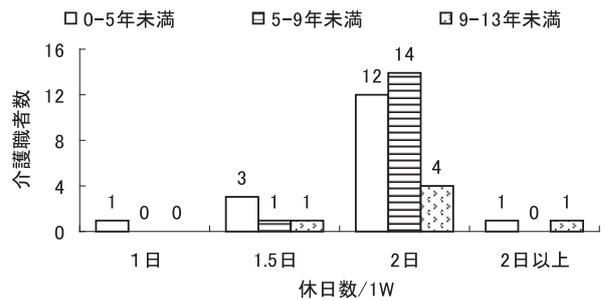


図4 1週間の休日数における経験年数区分別介護職者数

5. 1週間の休日数別における経験年数区分別の介護職者数

休日数の違いは介護の負担感に何らかの影響があるのではないかと考え，休日数別に経験年数区分の人数を調べた（n=38）（図4）。1週間における休日数で最も多かったのは，いずれの区分でも2日であった。2日以上と回答した者が経験短期区分では13/17人（76%），経験中期区分14/15人（93%），経験長期区分5/6人（83%）を占めて多く，4分の3以上の者が2日以上と回答していた。

6. 夜勤回数区分別における経験年数区分別の介護職者職数

経験短期者では夜勤回数が多いと耳にしたことがある。対象者の経験年数によって夜勤回数に違いがあるかを知るために，夜勤回数区分（3回未満，3—4回未満，4—5回未満，5—6回未満，6—7回未満，7回以上）別に経験年数区分別の介護職者数を調べた（n=40）（図5）。その結果，夜勤回数が少ない5回未満では経験短期区分（n=16）が4人（25%），経験中期区分（n=16）が4人（25%），経験長期区分（n=8）は7人（88%）であった。一方，夜勤回数が多い6回以上では，経験短期区分が8人（50%），経験中期区分が7人（44%），経験長期区分は1人（13%）であり，経験短期区分と経験中期区分で夜勤回数が多くなっていた。

このように夜勤頻度は経験短期区分が最も多く，次いで経験中期区分であったが，経験長期区分は比較的少なかった。

7. 日勤者1人交換1回時の交換人数区分別における経験年数区分別の介護職者数

日勤者1人が1回のおむつ交換で何人程度の交換を行っているか，交換人数について経験年数による違いがあるかを調べた。日勤者1人交換1回時の交換人数を区分（5人未満，5—10人未満，10—15人未満，15—20人未満，20人以上）して経験年数別の介護職者数を検討した（n=36）（図6）。1回の交換人数10人未満をみると，経験短期区分（n=13）では12人（92%），経験中期区分（n=15）では11人（73%），経験長期区分（n=8）では7人（88%）を占め，何れの区分も10人未満で多いが，特に経験短期区分

が多かった。一方、1回の交換人数の多い10人以上では経験短期区分が1人（8%）、経験中期区分が4人（27%）、経験長期区分が1人（13%）であった。このように日勤者1人で1回に多人数（10人以上）の交換をしているのは、経験中期区分が3割弱で他の経験区分を上回った。

8. 夜勤者1人交換1回時の交換人数区分別における経験年数区分別の介護職者数

筆者らは夜勤者で排泄介護の負担が高いことは過去の研究で明らかにしてきた²⁵⁾。日勤者と同様に、夜勤者1人交換1回時の交換人数を区分して経験年数区分別に介護職者数を調べた（n=39）（図7）。交換人数の比較的少ない10人未満をみると、経験短期区分（n=14）では7人（50%）、

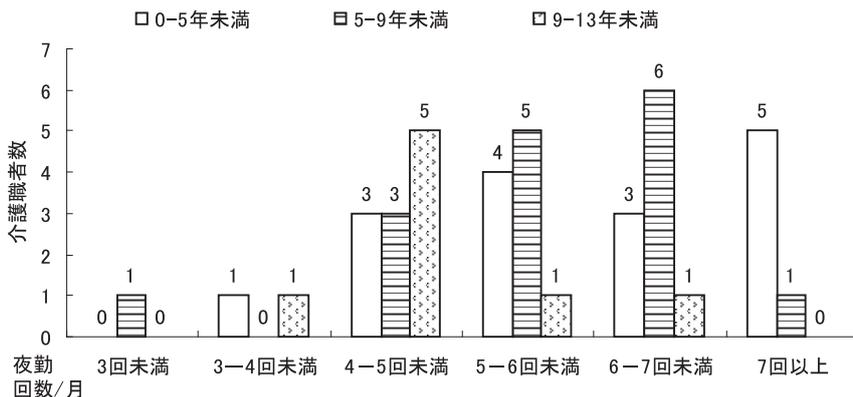


図5 夜勤回数別における経験年数区分別介護職者数

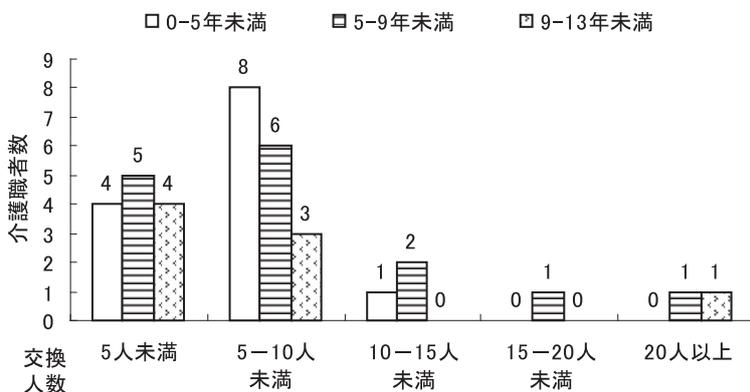


図6 日勤者1人交換1回時の交換人数別における経験年数別介護職者数

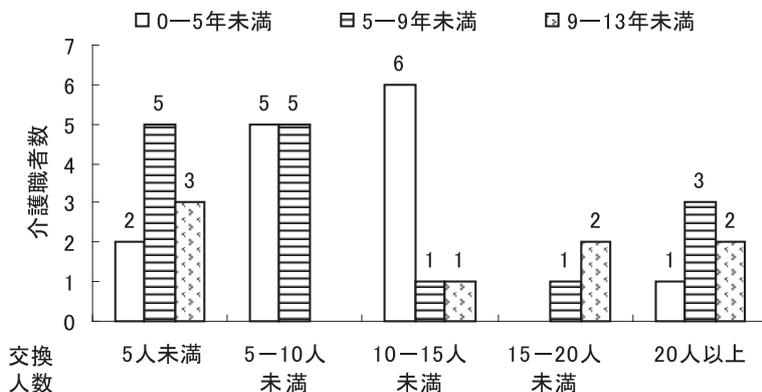


図7 夜勤者1人交換1回時の交換人数別における経験年数別介護職者数

高齢者入所施設の介護職者の介護負担の検討（その2）

経験中期区分(n=15)では10人(67%)、経験長期区分(n=8)では3人(38%)であった。一方、1回の交換人数の比較的多い15人以上をみると経験短期区分では1人(7%)、経験中期区分は4人(27%)、経験長期区分は4人(50%)であった。なお中間の交換人数の10-15人交換は経験中期区分が6人(43%)でピークであった。

このように、夜勤者1人交換1回の交換人数は、比較的交換人数の少ない区分では経験中期区分で多く、交換人数の多い交換人数区分では経験長期区分で多かった。経験短期区分は中期区分と経験長期区分の中間にあった。

9. 日勤者における経験年数区別の業務別負担感

日勤者における経験年数の違いによる業務別負担感を知るために、経験年数区別に介護施設で一般的に行われている介護業務9種(排泄, 食事, 移動, 更衣, 整容, 健康管理, 記録, コミュニケーション, 安全確保)別の負担感

の程度を点数化して検討した(方法参照)。ここでは9種の業務の合計量, 9種の業務中の負担感の大きい業務とその順位を経験年数区分別で比較した。また経験年数区分間の業務別負担感の差を検討した(表2)。

負担感の合計量を経験年数区分で比較すると、経験中期区分が22.6で最も小さく経験長期区分は26.4で最も高かった。経験短期区分は23.2で中間にあった。経験年数別に介護業務の負担感を高い方から点数とその順位でみると、経験短期区分の介護業務中の負担感は1.9-3.1の間にあり、負担感の高い業務は排泄が3.1で第1位, 移動が2.9で第2位, 第3位は記録とコミュニケーションで共に2.8であった。経験短期区分で負担感の特に高い(3点以上)業務は排泄介護の1/9つ(11%)であった。経験中期区分の負担感はいずれの業務でも3.0未満で低かった。その内高いほうから順に、安全確保が2.9で第1位, 移動が2.8で第2位, 第3位は排泄, 食事, 記録の3項目でいずれも2.7であっ

表2 日勤帯と夜勤帯の介護職者における経験年数別の業務別負担感

日勤帯											
経験年数	項目	排泄	食事	移動	更衣	整容	健康管理	記録	コミュニケーション	安全確保	合計量(平均)
①経験短期 (0-5年未満)	平均	3.1	2.6	2.9	2.5	2.2	1.9	2.8	2.8	2.4	23.2
	SD	0.7	0.7	0.7	0.7	0.4	0.6	0.9	0.9	0.6	
	順位	1	5	2	6	8	9	3	3	7	
②経験中期 (5-9年未満)	平均	2.7	2.7	2.8	2.3	2.1	1.9	2.7	2.5	2.9	22.6
	SD	0.7	0.7	0.8	0.4	0.6	0.6	0.9	0.9	0.5	
	順位	3	3	2	7	8	9	3	6	1	
③経験長期 (9-13年未満)	平均	3.1	3.3	3.1	2.6	2.5	2.4	2.9	3	3.5	26.4
	SD	0.4	0.7	0.6	0.5	0.5	0.9	0.4	0.8	0.5	
	順位	3	2	3	7	8	9	6	5	1	
クラスカルフォリス検定	①② ③									***	
ウイルコクスン検定	①:②									**	
	①:③									***	
	②:③									**	
夜勤帯											
経験年数	項目	排泄	食事	移動	更衣	整容	健康管理	記録	コミュニケーション	安全確保	合計量(平均)
①経験短期 (0-5年未満)	平均	3.3	2.6	3	2.6	2.2	2.3	2.5	2.5	2.8	23.8
	SD	0.9	0.8	0.7	0.7	0.5	0.5	0.8	0.8	0.9	
	順位	1	4	2	4	9	8	6	6	3	
②経験中期 (5-9年未満)	平均	2.9	2.6	2.6	2.4	2.3	2	2.4	2.4	2.9	22.5
	SD	0.4	0.7	0.8	0.6	0.6	0.8	0.6	0.8	0.7	
	順位	1	3	3	5	8	9	5	5	1	
③経験長期 (9-13年未満)	平均	3.1	3	2.8	2.6	2.5	3	3	3.4	3.4	26.8
	SD	0.6	1	0.7	0.5	0.5	0.8	0.8	0.5	0.7	
	順位	3	4	7	8	9	4	4	1	1	
クラスカルフォリス検定	①② ③						**		**		
ウイルコクスン検定	①:②										
	①:③						**		**		
	②:③						***		***		

表中の*印については有意差を示す(*: P<0.1、**: P<0.05、***: P<0.001)。

た。経験長期区分で負担感が特に高い業務は5/9つ(56%)あり、点数は3.0—3.5の間に分布していた。安全確保が3.5で第1位、食事が3.3で第2位、排泄と移動が共に3.1で第3位、コミュニケーションが3.0で第5位と続いていた。このように、経験長期区分が他の経験区分より負担感の点数が高く(最高3.5)、また、点数の高い業務が5つで多かった。

次に、業務負担感の有意差を経験年数区分間で比較した。その結果、安全確保において全ての経験年数区分間で有意差(クラスカルフォリス検定、 $P < 0.01$)が認められた。その内、負担感が高い区分を特定すると、経験短期区分より経験中期区分が有意に高く(ウイルコクソン検定、 $P < 0.05$)、経験長期区分間が経験短期区分及び経験中期区分より有意に高かった($P < 0.05 \sim 0.01$)。

このように、日勤者では経験長期区分が他の区分より安全確保で負担感が有意に高く、経験中期区分が他の区分より有意に低かった。

10. 夜勤者における経験年数区分別の業務別負担感

夜勤者における経験年数の違いによる業務別負担感を知るために、日勤者と同様に夜勤者の経験年数区分別に業務別(9種)の負担感の程度を検討した。合計量、負担感の高い業務とその順位を経験年数区分別で比較した。経験年数区分間の業務別負担感の差も検討した(表2)。

負担感の合計量を経験年数区分でみると、経験中期区分が22.5で最も低く、経験長期区分は26.8で最も高かった。経験短期区分は23.8で中間にあった。経験年数区分別に負担感の高い業務の点数とその順位をみると、経験短期区分の業務中の負担感2.2—3.3の間にあり、負担感の高い業務は排泄が3.3で第1位、移動が3.0で第2位、第3位は安全確保2.8であった。このように経験短期区分で負担感の特に高い(3点以上)業務は排泄と移動の2/9つ(22%)であった。経験中期区分ではいずれの作業でも3.0未満で低く2.0—2.9の間にあった。具体的には排泄と安全確保が共に2.9で第1位、食事と移動が共に2.6で第3位であった。また、経験長期区分で負担感の特に高い業務は6/9つ(62%)あり、点数は3.0—3.5の間に分布していた。具体的にはコミュニケーションと安全確保が共に3.4で第1位、排泄が第3位、食事、健康管理、記録の3つが3.0で第4位と続いていた。

このように夜勤者では日勤者と同様に経験長期区分が負担感の点数が高く(最高3.5)、また、点数の高い業務数が6つで多かった。

次に、これらの負担感を経験年数区分間で有意差をみた。その結果、健康管理、コミュニケーションにおいて全ての経験年数区分間で有意差($P < 0.05$)が認められた。その内、負担感が高い区分を特定すると、経験長期区分が経験短期区分および中期区分より負担感が有意に高かった($P < 0.05 \sim P < 0.01$)。

このように夜勤者では経験長期区分が健康管理、コミュ

ニケーションの業務で負担感が他の区分より有意に高かった。

考察

介護経験年数の少ない者で離職が高いと言われて²⁶⁾おり、介護負担と経験年数は関係していると予測される。しかし、介護負担と介護職者の経験年数の関係は未だ明らかにされていないので経験年数と介護負担の関係を検討した。その結果、本研究では介護負担の有用な情報が得られたと考えている。そのデータから介護負担の要素である夜勤回数、休日数、介護職者1人の交換1回における交換人数、業務別負担感等と経験年数の関係について考察する。

1. 経験年数からみた介護労働の傾向

介護労働については労働基準法に1週間の労働時間は40時間以内で週1日以上以上の休日を設ける必要があるとされている²⁷⁾。本調査での1週間における休日は2日以上と回答した者がいずれの経験年数区分(76%, 93%, 83%)でも多く、4分の3以上の者が回答していた。これらから介護労働者に対して人員不足と言われながらかなりの者に週休2日制が実施されていることが伺えた。

夜勤業務は介護職者にとって負担が高いと言われて²⁸⁾いる。夜勤回数の多少が介護職者の介護負担に影響することは当然であると思われるが詳しい情報がない。

夜勤回数は経験の浅い者で多いのではないかと考え夜勤回数を調べた。その結果、夜勤回数が多い月6回以上の者がそれぞれの経験区分(50%, 44%, 13%)におり、経験短期区分が半数で最も多く、次いで経験中期区分であり、長期区分は1割余に留まっていた。経験短期区分の者が夜勤を頻回に行っており予測した通りの結果であった。介護施設では夜勤者の介護業務は就職後数ヶ月から行われており経験短期者でも夜勤の要員となっているのが現状である。それに施設の介護人員不足が加わり経験短期者が夜勤の一番の担い手になっているのではないかと考えられる。夜勤回数が多いことと経験3年以内での離職者が多い²⁹⁾ことが直接関係するか否か不明であるが、その関係について興味もたれる所である。

2. 経験年数からみた介護業務別負担感の傾向

経験短期区分では負担感が高い3点を超える介護業務は3つあり排泄は日勤帯夜勤帯共に高く、移動は夜勤帯で高かった。経験長期区分では負担感の高い項目が日勤と夜勤をあわせて11あり、日勤帯と夜勤帯共に高い業務は安全確保、コミュニケーション、食事、排泄であり、移動は日勤帯で高く、健康管理と、記録は夜勤帯で高かった。

経験長期区分では他の経験区分に比して有意に負担感の点数が高い業務が多かった。特に日勤帯では安全確保の負担感が他の区分より有意に高く、夜勤帯では健康管理、コミュニケーションで有意に高かった。経験長期区分では既

婚者が多くなっていた。特に深夜勤務の疲労は結婚や子供の有無に影響されるとするとされ³⁰⁾、経験長期区分で既婚者が多ことから家事や育児の割合が大きいが予測される。家事や育児からくる疲労が負担感の高いことに影響していると考えられた。また、健康管理、安全確保、コミュニケーション等の業務は現場経験を積むことでその重要性の意味が分かるといわれており³¹⁾、経験を積んだ経験長期区分で負担感が高いのではないだろうか。経験年数を経て知識技術を身につけ人間関係の調整ができる者は仕事上で役職が付き管理的な仕事をしていると推測される。管理的自覚を持ち日々の業務をこなす中で利用者の生命の安全や健康維持に力を注ぎ、職員と利用者のトラブルの調整を含めた利用者との信頼関係維持に努めていることが予測される。これらから経験長期区分で健康管理、安全確保、コミュニケーションの業務で負担感が高いのではないかと推察できる。

一方で経験中期区分では他の経験区分より負担感が低いことについては、経験中期区分の者は老健施設の従事者が多い結果から、他の区分より看護師数の配置が多く、看護師との連携が容易にとれることが他の区分より負担感が低いことに影響しているのではないかと考えられる。また、本調査での経験中期区分は年齢が25歳～29歳の間にあり、業務に熟練しチーム内では発言力を持ち仕事に生きがいを持ち働いており、ストレスの解消法ができていないかと考えられた。仕事の能力発揮や仕事の手応えを感じている者は離職者が少ないと言われており³²⁾、介護における負担感を乗り越える原動力になっているものと考えられた。

3. 今後の課題

介護職者の離職の原因には介護労働に比べて待遇が悪いという介護職者の意識が根底にある。国の責任において改善策が出され³³⁾、改善方向に向かっているものの、まだまだ給与や福利厚生等の待遇面での充実が必要である。

今後、介護職者の負担感の軽減を実現するために、介護方法や介護形態の改善により実現する方策を考えていきたい。そのために、本調査では介護負担要因の情報を集めることが出来た。一方、専門職者として利用者の尊厳を守り利用者の幸せを実現すると共に、介護職者の喜びや誇りを得る事のできる介護教育を行い、介護職者が負担感を乗り越えて介護し続ける力を身につける必要がある。負担感を乗り越えて行くために、遣り甲斐や生きがいを持って介護が行える介護教育を目指したい。

文献

- 1) 介護福祉士養成講座編集委員会，資料編，厚生労働厚生局「介護保険事業状況報告」要介護職者数の推移。中央法規出版，P42，2009。
- 2) 厚生統計協会編：人口の動向。国民福祉の動向2009，

- 56 (12)，17-18厚生統計協会
- 3) 前掲2)，老人問題の現状，112-113。
- 4) 四日市市議会教育民生常任委員会編：介護従事者・事業者の状況に関わるアンケート調査結果報告介護職員の過不足の状況。12，2009。
- 5) 前掲2)，要介護度別認定者の数の推移。150。
- 6) 全国社会協議会編：社会福祉事業に従事する者の確保を図るための措置に関する基本的指針。社会福祉関係施策資料集26，191-193，2007。
- 7) 井関智美，三上ゆみ：高齢者施設における介護職者の介護負担の検討。新見公立短期大学紀要，第30巻，55-61，2009。
- 8) 緒方正名，當瀬美枝，山田寛子：在宅ケアにおける介護負担度の検討。川崎医療福祉学会誌，7 (1)，19-32，1997。
- 9) 成木弘子，飯田澄美子，野馳孝子：後期高齢者の主介護者における介護負担軽減に関する研究。聖路加看護大学紀要，22，1-3，1996。
- 10) 白田滋，茂木信介，富田敦子，鈴木庄亮：脳卒中患者の主介護者における介護負担感および主観的健康度とその関連要因。日本公衆衛生雑誌，9，584-563，1996。
- 11) 塚崎恵子，牧本清子：在宅高齢者のケア：排泄問題と介護負担。金沢医療短期大学紀要，19，131-134，1995。
- 12) 横関利子，渡辺順子，牧田光代，蓮村幸克：特別養護老人ホーム介護者の勤務および介護動作別作業強度。日本衛生雑誌，55，567-573，1997。
- 13) 徳田哲男，児玉桂子：特別養護老人ホームにおける介護負担の改善に関する研究。老年社会科学，18 (2)，113-121，1997。
- 14) 筒井孝子：介護業務における精神的負担感および身体的負担度に関する研究－特別養護老人ホームにおける介護業務内容調査に基づく実証研究－。病院管理，39，39-48，1996。
- 15) 永田久雄，季善永：特別養護老人ホームでの介護労働の実態調査と今後の高齢介護労働の検討。労働科学，75 (12)，459-469，1999。
- 16) 前掲10)
- 17) 前掲12)
- 18) 前掲13)
- 19) 前掲14)
- 20) 前掲15)
- 21) 前掲15)
- 22) 全国社会協議会編：介護労働者の確保・定着等に関する研究会編：介護労働者の確保・定着等に関する研究会中間取りまとめ。社会福祉関係施策資料集27，204-206，2008。
- 23) 四日市市議会教育民生常任委員会編：介護従事者・事業者の状況に関わるアンケート調査結果報告離職者勤続年数別内訳。10，2009。
- 24) 前掲15)

- 25) 前傾 7)
- 26) 前傾23)
- 27) <http://www.houko.com/00/01/S22/049.HTM#s4> :
労働時間, 休息・休日, 労働基準法, 2010.
- 28) 井関智美, 田内雅規: 特養におけるおむつ利用者の心身障害状況とおむつ介護形態の分析. 日本看護研究学会雑誌, 27 (2), 77-84, 2004.
- 29) 前掲 4)
- 30) 久保木寿恵, 布施淳子: 深夜労働における看護師の蓄積疲労とその対処行動に関する研究. 日本看護学会論文集看護総合35号, 52-54, 2004.
- 31) 江田純子他: 本学における基礎看護技術の到達度に関する報告. 新見女子短期大学紀要10巻, 155-180, 1989.
- 32) 野原かおり, 桐野匡史, 藤井保人, 谷口敏代: 介護職の仕事継続動機と関連要因. 介護福祉学, 17 (1), 55-65, 2010.
- 33) 社会保障審議会介護給付分科会編: 平成21年度介護報酬改定に関する審議報告. 社会福祉関係施策資料集27, 158-166, 2008.